

その他

自律学習センターCLIPによる交流の拡充

—学内における橋渡しの機会の探索—

菅 すゝね, Lucius Von Joo, Robert Werner

訳注

本稿は, “Expanding a Self-Access Center’s Contact: Finding Opportunities for Bridge-Building on Campus” の翻訳である。本稿の目的は, 流通経済大学のコミュニティ間における自律学習センター (CLIP) と学生への働きかけについて, 幅広く学術的な視点での対話を促進することである。

要約

本稿では, “Community Learning International Plaza” (通称CLIP) と名付けられた自律学習センター (self-access center : SAC) が, 首都圏のスポーツ中心のキャンパス (流通経済大学龍ヶ崎キャンパス) において行なった, さまざまなグループに対する働きかけや橋渡しの活動について論じる。CLIPが3年前 (2017年4月) に設立された当初, 学生も教員もその目的を理解していなかった。そのため, CLIP教員及び事務スタッフ (本稿の著者ら) は, 教員や学生に向けて自律語学学習 (self-access language learning : SALL) とは何か, CLIPが提供できるサービスとはどのようなものか, を説明する必要があった。CLIPでは, 新入生オリエンテーション実施中に, 学生を引率してきた教員に対して, 将来的に学生向けのプログラムを共に企画・実施することに興味があるか非公式に働きかけた。また, 課外活動を行っているクラブやチームからは, 特定のニーズ (ライフセービングのための英語や, JICAによるインドネシアでのラグビー普及活動のためのインドネシア語と英語によるコミュニケーションなど) に合わせたワークショップの開催についての依頼があった。私たちが行なった働きかけや橋渡しの活動は, CLIPが想定していなかった利用者呼び込むことにつながった。Cotterall

& Reinders (2000)によれば、自律学習センターには、語学の授業を実生活の英語になく懸け橋の役目があるという。CLIPが開催したワークショップも実生活に沿ったものであり、参加者の自己効力感を高め、第二言語としての英語の利用を促進した。CLIPが行なったさまざまな働きかけは、CLIPを龍ヶ崎キャンパスの学生にとって意味あるものにするという点でも、「特定の目的のための英語」(English for specific purposes: ESP)プログラムを立ち上げるという点でも、成功をおさめたといえるであろう。

Abstract

This article discusses outreach and bridge-building between a self-access center (SAC), called the Community Learning International Plaza (CLIP), and various groups at a sports-focused campus in greater Tokyo (Ryutsu Keizai University, Ryugasaki campus). When the SAC opened three years ago (April 2017), students and faculty did not know its purpose. Therefore, CLIP teachers and administrators (the authors of this paper) saw the need to conduct outreach to educate teachers and students about self-access language learning (SALL) and the services offered. Through orientation sessions, we were able to informally speak with subject teachers who were accompanying their students, learn if they might be interested in collaborating on future student programs, and plan accordingly. We were also approached by student clubs and teams to make workshops that fit particular needs (e.g., English for life saving and Indonesian/English communication for teaching rugby in Indonesia through JICA). Outreach and bridge-building connect the CLIP to users who otherwise may not have sought out services. In this way, the SAC acts as a bridge between language classes and real-life English opportunities (Cotterall & Reinders, 2000) through workshops that simulate real-life situations and promote self-efficacy and second language use. Outreach has been successful both in making the SAC relevant and in helping us set up English for specific purposes (ESP) programs tailored specifically to the needs of students at this campus.

キーワード：

アウトリーチ, 懸け橋, スポーツ, 特定の目的のための英語, 自律語学学習

Keywords:

outreach, bridge-building, sports, English for specific purposes, self-access language learning

自律語学学習 (self-access language learning : SALL) の分野が成長を続ける中、自律学習センターが現時点で組織全体に対してどのような役割を果たしているかを評価する必要がある。同時に、センターがその可能性を最大限に発揮できているかを問うべきである (Berman, 2020)。懸念事項の一つは、もっともサービスを求めている利用者のニーズにセンターが応じようとすることである。つまり、そうした人々に対して調査が行なわれ、限られた利用者のニーズにもとづいてサービスが提供されることへの懸念である。こうした調査のおかげでセンターが大きく進歩し、自律学習の分野が発展してきたのだが、調査の対象にならなかった利用者についてはどうであろうか。潜在的な利用者が調査の対象になっていないことによって、データに偏りが生じる。そして、潜在的な利用者にとっては、適切でないサービスが提供され続ける。目に見えない利用者に関する研究は教育の分野ではあまりなく、自律学習の分野においてはもっとない。一方、医療の分野では十分な研究の蓄積がある。しかも教育と同様に医療も、基本的にすべての利用者に対応することを目指している。Marcellus (2004) は、医療における目に見えない利用者は、大抵の場合、偏ったデータに原因があることを指摘している。この指摘によって研究の妥当性が揺らぎ、これまでに開発された医療サービスは、すべての利用者のニーズを反映するものではないことがわかったのである。自律学習センターの目標が学内のすべての人々のニーズに対応することであるならば、研究者は選択的な調査によって対象が限定される事態を避ける努力をすべきである。自律語学学習と医療現場とでは提供されるサービスの性質は異なるものの、潜在的な利用者から得られる情報の欠如は、データの偏りと同様の影響と結果を及ぼす。未知の利用者につながる方法の一つは、彼らが既に参加している学内のプログラムに働きかけることである。

本稿では、本学の自律学習センター “Community Learning International Plaza” (通称 CLIP) が行なった、学内のさまざまなグループに対する働きかけや橋渡し活動について述べる。流通経済大学龍ヶ崎キャンパスは、首都圏に位置し、所属学生数は約2,000人である。本キャンパスでは、ほとんどの学生がスポーツ健康科学部に所属しており、経済学部、社会学部、流通情報学部、法学部に所属する学生の割合は低い。英語を専攻する学生はいないが、一年次と二年次では、英語は週に一度の必修科目であり、以降は選択科目として継続することができる (Werner & Von Joo, 2018)。そのほかに、英語や英語以外の外国語を使う機会を求めて、学生は自律学習センターを利用したり、海外へ留学したりしている。CLIPは図書館の入口付近の、人通りの多い場所にある。学生の大半はCLIP利用についての新生オリエンテーションに参加しているため、ほとんどの学生はセンターと交流をもったことがある。本稿の著者は、CLIPを運営する主要メンバーの3人である (教員兼アドバイザー2名、事務スタッフ1名)。

潜在ニーズへの働きかけ

CLIPが3年前(2017年4月)に設立された時には、学生も教員もCLIPの目的を理解していなかった。そこで私たちは、二つの大きな目標を掲げて、働きかけをすることにした。(1)教員に対してセンターの機能を説明すること(そうすれば教員が学生にセンターの利用を勧めることができる)と、(2)学生に対してセンターに来れば何ができるのかを伝えることである。Matsuoら(2015)は、センターの運営がうまくいくには教員からの協力が不可欠であると述べている。さらにMynard & Stevenson(2017)は、他の部署との間に橋をかけるには透明性が重要だと強調している。「少しずつ信頼を構築することで、後に支援を得られるであろう」(p. 179)。そこで、私たちは初期の段階から教員の理解と支援を得ることを目指した。

第一の目標を達成するため、私たちはまず初めに本学の英語担当教員の会合を訪ねることにした。センター開設の計画時(CLIPメンバー着任前)に、教員たちは事前相談を受けていなかった。私たちは彼らに、自分達は彼らをサポートするために存在するということを理解してもらいたかったのである。その後、私たちは全5学部の学部長に対してプレゼンテーションを行ない、自律学習センターの歴史や背景について説明し、CLIPが自律学習センターとして機能しようとしていることを伝えた。各学部長はこのプレゼンテーションから得た情報をそれぞれの学部の教員達へと共有した。

次に、二番目の目標に取り組むため、私たちはゼミ単位での新入生オリエンテーションを実施した。ゼミ担当教員が学生を引率してきてくれたので、私たちは意図せずしてすべての学部の教員と会し、交流することができた。学生達が英語で行われる「宝探し」アクティビティに参加している間、担当教員は学生と一緒に参加してもよいし、学生に助言を与えてもよいし、自分が楽しんでよいし、見守っていてもよかった。こうした状況は、英語に居心地の悪さを感じる教員にとってプレッシャーの少ない状況だったといえる。Horwitz(1996)は、教育現場において第二言語を使って話すことは教員に不安感を抱かせる可能性があるとして述べている。Horwitzの説は語学クラスに関するものだが、ゼミ担当教員は学生達を指導する立場にあるため、状況は似ているといえる。オリエンテーションの実施中に私たちは教員たちと立ち話をする中で、どの教員が英語に興味を持っているかを知ることができた。この情報は後に新しい学生向けのプログラムを開催するにあたり、誰に協力を仰げばよいかを考えるのに役立った。例えば、この時の会話がきっかけとなり「英語でバスケット」ワークショップ(バスケットボールコーチの教員と共同立案)の開催につながった。学生達は英語のみを使って、シュート競争をウォームアップとして行ない、バスケットの用語やルールを学び、試合を行なった。

ニーズに基づくプログラム

私たちの側から働きかける活動に加えて、特定のニーズを持つ学生や教職員の側から働きかけられることもあった。例えばライフセービング部の学生は、夏のライフガード業務に際し英語を話す海水浴客の安全確保のために、メンバーが知っておくべき実用英語を教えて欲しいと依頼してきた。結果として、このプログラムには40人以上の学生が参加した。このような「特定の目的のための英語」プログラム（English for specific purposes : ESP）は、英語を専攻していない学習者にとって一般的なニーズであろう（Hutchinson & Waters, 1987）。CLIPの提供する資料やサービスの多くはスポーツに関連しているが、スポーツ以外の領域にも対応している。

もう一つの例は、本学の男子・女子ラグビー部のメンバーのためのプログラムである。ラグビー部は1ヶ月間におよぶ国際協力機構（JICA）のプログラムに過去3年連続して参加している。毎回10名以内の学生アスリート達が、インドネシア中の学校でラグビーを教えている。彼らのサポートとして始めたCLIPのプログラムは、当初は1対1の英会話練習であったが、3年目には学期を通してインドネシア語の基本会話やラグビー用語を学ぶ本格的なプログラムとなった。このプログラムでは、学生達の自己効力感の向上と、外国語による交流への意欲を高めることも目指した。

二つのケースでは、ニーズに応じて試行錯誤を重ね、1ヵ月から3ヵ月にわたって、週に一度のペースで集まる一連のワークショップを企画した。働きかけと橋渡しの活動によって、CLIPは私たちが想定していなかった利用者となつたのである。

懸け橋としての自律学習センター

Cotterall & Reinders (2000) は、自律語学学習を橋、そして時には砦、と評している。彼らの見解によれば、自律学習センターは、教室での語学の授業を実社会の語学体験につなぐ懸け橋の役割を果たすという。CLIPは、実際の生活の場面を想定したオリジナルのワークショップを多くの学生に提供することでこの役割を果たすと同時に、学生たちの自己効力感を高め、第二言語の利用を促進している。ただし本学の場合、学生は学位取得のために語学の単位を多数取得する必要がないため、教室での語学の授業が起点になるとは限らない。その代わりに、学生が過去に受けた語学の授業の経験を起点にして、英語を必要とする現時点での実生活の場面につなぐ懸け橋の役割を、CLIP（及び広義の自律語学学習）が果たしている。

さらにCotterall & Reinders (2000) は、レベルの高くない語学学習者は自律学習センター以外の学習リソースをほぼ利用しないことを見いだしている。彼らは、センターが「学習者にとって快適になり過ぎ、外の世界への懸け橋となるよりも、心地よい

砦（そこから踏み出すことを思いとどまってしまう）として機能する」のではないかと疑問を呈している（Cotterall & Reinders, 2000, p. 30）。働きかけや橋渡しの活動は、CLIPを囲む高さ2メートルのガラス製の仕切りという壁ならざる壁を、比喩的にも文字通りの意味でも開かれた空間にしている。CLIPは図書館のラーニングコモンズと呼ばれる共有スペースに近接しているため、学生達はCLIPと図書館の間を頻繁に行き来することができる。Cotterall & Reindersの考察によれば、砦はその壁の内側にいる者をサポートし、学生達を引きこもらせることもできる。この比喩表現は、同じ壁が他の利用者を締め出す障壁にも成りうるという意味を持つ。Berman（2020）はこの点について、個人が日常的に排除されたり、気まずい状況が生じて暗黙のルールができたりする可能性を指摘している。更に研究が進めば、学生間の相互作用についての理解が深まり、より多様性を受け入れる空間にすることができるであろう。

理想としては、大学全体に開かれた壁を持つ効果的なセンターが望ましい。ただし、Datwani-Choy（2014）はサービスの有効性と利用者の増加のバランスを保つべきであると警告している。既存のグループとの学際的な交流活動は、センターへの新たな期待につながると同時にプレッシャーにもなるので、それによってバランスが崩れてしまうかもしれない。自律学習の新しい方向性として、センターと潜在的な利用者の適合度を最初に測定することがあげられる。人と環境（person-environment：PE）の適合度を測定することで、その人に適した支援を提供することが可能になる（Caplan, 1987）。この場合、人（P）は学生の語学に関するニーズを表し、環境（E）は物理的な空間、レイアウト、既存のサポートを表す（例えばAugeri & Kajita, 2017; Berman, 2020を参照）。人と環境の適合度は、初期評価に役立つだけでなく、定期的に測定することで、どのようにアプローチすれば最適なバランスになるかを見いだすのに役立つであろう。

結論

働きかけの活動は、CLIPの進路に劇的な影響を与えた。本稿で述べた協力関係によって、CLIPはその発展途上で周囲のニーズに見合ったサービスを開発することができた。既存の学内プログラムに働きかけたおかげで、今ではスポーツに関連する独自の英語プログラムを提供している。それぞれの自律学習センターにおける活動は個々に異なるため、適切な働きかけの度合いはセンター毎に異なるであろう。しかしながら、そこには常に自律学習センターが提供するサービスを必要とする潜在的な利用者が存在することもまた確かである。働きかけの適用可能性やその多様な形態に関して、更なる研究が必要である。例えば、他の自律学習センターの成長過程において、働きかけがどのように組み込まれているかを探る調査をすべきであろう。そのデータは、既存のセンターにも発展途上のセンターにも役立つであろう。なぜなら、自律学習の分野の発展と

ともに、多様性の幅広さもますます広がっているからである。

引用文献

- Augeri, J., & Kajita, S. (2017). Trends and outcomes of the innovative physical learning spaces: An international comparative approach. *Information Processing Society of Japan*, 42, 264-270. <http://id.nii.ac.jp/1001/00182882/>
- Berman, N. (2020). A critical examination of informal learning spaces. *Higher Education Research & Development*, 39 (1), 127-140. <https://doi.org/10.1080/07294360.2019.1670147>
- Caplan, R. D. (1987). Person-environment fit theory and organizations: Commensurate dimensions, time perspectives, and mechanisms. *Journal of Vocational Behavior*, 31 (3), 248-267. [https://doi.org/10.1016/0001-8791\(87\)90042-X](https://doi.org/10.1016/0001-8791(87)90042-X)
- Cotterall, S., & Reinders, H. (2000). Learners' perceptions and practice in self access language learning. *The TESOLANZ Journal*, 8, 23-37. <https://www.tesolanz.org.nz/publications/tesolanz-journal/volume-8-2000/>
- Datwani-Choy, D. (2014). *Evaluating a self-access centre's effectiveness and efficiency: A case study* [Doctoral dissertation]. Northeastern University, USA. <https://repository.library.northeastern.edu/files/neu:349607/fulltext.pdf>
- Horwitz, E. K. (1996). Even teachers get the blues: Recognizing and alleviating language teachers' feelings of foreign language anxiety. *Foreign Language Annals*, 29 (3), 365-372. <https://doi.org/10.1111/j.1944-9720.1996.tb01248.x>
- Hutchinson, T., & Waters, A. (1987). *English for specific purposes*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511733031>
- Marcellus, L. (2004). Are we missing anything? Pursuing research on attrition. *Canadian Journal of Nursing Research*, 36 (3), 82-98. <https://cjr.archive.mcgill.ca/article/view/1901/1895>
- Matsuo, S., Maxwell, S., & Pileggi, M. (2015). An introduction to self-access learning centers at the university level. *The 2015 PanSIG Journal*, 114-119. <https://pansig.org/publications/2015/2015pansigjournal.pdf>
- Mynard, J., & Stevenson, R. (2017). Promoting learner autonomy and self-directed learning: The evolution of a SALC curriculum. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 8 (2), 169-182. <https://doi.org/10.37237/080209>
- Werner, R. J., & Von Joo, L. (2018). From theory to practice: Considerations in opening a new self-access center. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 9 (2), 116-134. <https://doi.org/10.37237/090205>